

神社の杜(五十)

「雨乞いの籠」 東村山市の昔話から

片柳 茂生

東村山市には、前に紹介しました昔話「鬼の善意」のほかにもう一つ御嶽山にまつわる昔話「雨乞いの籠」がありますので、今回はそれをご紹介いたします。紙面の都合上原文を少し変えて掲載する事をご了承下さい。ではそろそろ始めましょうか・・・。

今秋津町あたりは、昔は特に日照りに弱い所だった。夏の七月から八月にかけて雨が全く降らない年なんかもあって農家はずいぶん難儀したんだと。遠くから水を汲んできては作物に水をかけるのだが、すぐに干上がってしまうしまつだった。

「このまんまだと、冬を越せねえ。どうすべ」

村役たちが集まっていろいろ相談するのだが、こんな時はたいいてい

「雨乞いをすんべえ」



イラスト：紺野美織

という事になる、そして百姓たちは、真剣になって雨乞いの準備を始めるのだった。

村人の中から足の速いものが二人一組で何組か選ばれ、この者たちのうち一組が代表として御嶽神社に遣わされた。神社に着いたら神様に、雨が

降るように熱心に祈願して、それから『七代の滝』に行き、その滝の水を、持ってきた青竹の筒にいれて村まで持ち帰るのだが、さあここからが大変だ。

村へ帰る途中でちよつとでも休んだりすると、その休んだ場所に雨が降ってしまうという言い伝えがあるので、休むことなんかできないのだと。そこで、途中に二番使い、三番使いが待っていてその水を手渡して休むことなく走って村まで帰ったのだと。

持ち帰った水は、氷川様まで運ばれ、大桶に入れられ、そして神主さんに祝詞をあげてもらい「大山大将、大山大将」と掛け声をかけながらその水をひっかけあい、その後みんなで柳瀬川に繰り出して、川の中でも威勢よくもみ合ったり水をひっかけあつたりするのだが、その姿は岸で見てもおもしろい見物だった。

この秋津の雨乞いは、昔、持明院の寺宝だった『雲中の竜』という掛け軸を掲げて行い、必ず雨が降ったのだった。そのため雨乞いの時には干し物はするなといったり、雨が降ったら村中あげてうどんを打ったり、まんじゅうを作ったりして、一日仕事を休んで神様に感謝する日にしたんだってさ。

つい何年か前に神社でも雨乞いを行いましたでしたが、そのやり方はこの昔話の内容とそっくりでした。そしてこの雨乞いをした地域ではすぐに雨が降ったらしいですよ・・・。

皆さん、雨乞いの時は御嶽山を忘れずに！

平成二九年地域文化功労者賞受賞

齋藤慎一先生

「武州みたけ」において宝物シリーズで連載していた齋藤慎一先生が、長年に亘る青梅市やその周辺の文化財調査・保護活動にご尽力された功績に対し、平成二九年地域文化功労者として文部科学大臣より、昨年十一月に表彰されました。

当社が所蔵する宝物の調査と古文書から御嶽の歴史を紐解き私たちに「教示」下さっています。時代にあわせ様々な価値観の中、先人達の苦勞と想いによって今があることに、現在をどのように繋いでいくか改めて向き合う機会を私たちは得ています。受賞に際し、心からお祝いを申し上げます。

宝物殿案内

開館日 土・日・祝日のみ  
開館時間 九時三〇分～十六時

※ 季節により毎日開館する場合もありますので、HPまたは社務所までお問合せ下さい。

表紙写真

「男具那社へ」

撮影 鶴巻育子

あとがき

春を迎え、桜開花の声も聞こえ始めました。「さくら・さくら」「さくら・ちる」。桜が咲く美しい姿だけでなく、桜が散る儚さを感じて言葉紡ぐ日本人の心。誰もが持つ美しい心を柔らかな春の日差しのように、いつでも心の中に暖めていけたらと思います。

奉納俳句選者岡田日郎先生、齋藤慎一先生、フォトグラファー鶴巻育子様、片柳茂生様、玉稿をありがとうございました。

平成三〇年 三月三十一日発行

〔年二回発行・非売品〕

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八(七八)八五〇〇  
FAX 〇四二八(七八)九七四一

印刷 (株)成和印刷  
http://www.musashimitakejinja.jp/